純真学園大学雑誌
第12号　令和4年3月

Journal of Junshin Gakuen University,
Faculty of Health Sciences Vol.12, March 2022

報告

大学職員の教職協働への認識および協働上の課題
～模擬患者参加型のコミュニケーション演習を通して～

村井 孝子[1)]・肥後 すみ子[2)]・村田 尚恵[1)]・石橋 通江[1)]

[1)] 純真学園大学　保健医療学部　看護学科
[2)] 元純真学園大学　保健医療学部　看護学科

Recognition of collaborative work between academic and non-academic staff and collaboration issues through simulated patient-participatory communication exercises

Takako MURAI[1)], Sumiko HIGO[2)], Naoe MURATA[1)], Yukie ISHIBASHI[1)]

1）Department of Nursing Science, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University
2）Department of Nursing Science, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University[1]

要旨：　本研究の目的は , 模擬患者参加型のコミュニケーション演習を通して，大学職員の教職協働への認識および協働上の課題を明らかにすることである．模擬患者参加型のコミュニケーション演習に参加した大学職員7名を対象に半構造的インタビューを実施し，内容を分析した．その結果，教職協働に対して，【学ぶ学生を再認識する機会になる】，【自身の役割の再認識の機会となる】，【新たな役割への意欲を感じる】，【模擬患者としての言動に迷う】が抽出された．教育活動を通した教職協働を進めるためには，教育内容に関する教職員の共通認識を持ち，準備段階で十分にディスカッションを行う必要性が示唆された．

キーワード：　教職協働，大学職員，模擬患者，コミュニケーション演習

Abstract：　In this study, we aimed to clarify issues regarding recognition of and collaboration with non-academic teaching staff through simulated patient-participatory communication exercises. Semi-structured interviews were conducted with seven university staff members, and the interview content was analyzed. We extracted the following response categories on collaboration in teaching professions: “an opportunity to re-acknowledge the students who are learning”, “an opportunity to reaffirm my own role”, and “feel motivation for a new role”. Moreover “hesitate to behave as a simulated patient” was identified as a collaborative issue. Thus, to promote collaboration among teaching professions through educational activities, mutual understanding among faculty and staff regarding the educational content of activities should be established and sufficient discussions should be held at the preparatory stage.

Keyword：　collaborative work between academic and non-academic staff, non-academic staff, simulated patient, communication exercise

1. 緒言

国内には803校の大学が設置されており[1)]，さまざまな学問分野の学士教育が行われている．近年，大学にはグローバル化に対応した教育環境づくりやイノベーション創出のための教育・研究環境づくり，学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能の強化等が求められており[2)]，大学教員をとりまく環境にも変化が生じている．2017年の文部科学省の大学設置基準の改正では，大学の教育研究活動等の組織的かつ効果的な運営を図るため，大学教員と事務職員等との適切な役割分担の下で連携体制を確保すること[3)]が求められている．これを受けて，全国の大学では教職協働の実践が進められており，入試広報業務や就職支援，IR（Institutional Research）等の取り組みが報告されている．

一方，看護基礎教育では，初年次教育において医療の場でのコミュニケーション技術を向上させ

[1] Second author was affiliated with JUNSHIN GAKUEN University at the time of the study.

令和4年2月10日
純真学園大学　保健医療学部　看護学科　准教授

ることが課題として挙げられている．看護師の実践は人を対象としており，対象の人としての尊厳や権利を擁護することや看護実践について説明し同意を得ること，対象との援助的関係を形成する能力といったヒューマンケアの基本に関する実践能力[4]が必須である．さらに2022年度からは，コミュニケーション能力の強化に関する教育内容の見直しが求められている．

看護学生は，看護専門科目においてコミュニケーション技術を学習する．コミュニケーションに関する基本的知識にはじまり，対象とコミュニケーションを図るための前提として自己を知ること，対人距離や目線，立ち位置などの物理的要素，対象との具体的なコミュニケーション技法など，一言にコミュニケーションといえども，学習内容は多岐にわたる．しかしながら，近年は学生の人間関係の希薄化が問題となっている[5]．その要因として核家族化による高齢者とコミュニケーションを図る機会の喪失，IT 化の進展による対面コミュニケーションの減少が挙げられる．学生は IT 関連機器の取り扱いには非常に慣れており，容易に活用できる一方，対人距離をとることや会話を続けること，話題の提供については苦手としている者も多い．このような中，初めて医療施設で実習する1年生にとって，受持ち患者とどのようにコミュニケーションを図り，良好な対人関係を形成していくのかは高いハードルがあることが推察される．

学生が困難感や不安なく患者とコミュニケーションを図り，自己を振り返るための取り組みとしては，模擬患者を活用した模擬患者参加型教育についての報告がある．

看護の対象である人は，同じ技術を提供してもその反応は人それぞれである．対象の反応を確認しながら，双方向的な関わりが求められるコミュニケーション演習では，患者役としての言動がさまざまであってよいと考える．そのため，事例に沿ってさまざまな反応を示す模擬患者（Simulated Patient）が参加することで，リアリティーのある体験により患者のとらえ方の変化，患者や実習のイメージ化をもたらし，コミュニケーションの大切さや模擬患者のフィードバックからの学び，振り返りの機会を得るなどの効果[9]がもたらされることが報告されている．

一般的に，模擬患者は NPO 法人や大学などで一定の専門的な訓練を受けた者や看護経験者，訓練を受けていない地域のボランティアが担っている[6]が，A 大学では1年次後期に履修する基礎看護学実習前のコミュニケーション演習に，大学職員が模擬患者として参加している．この取り組みは，学生にとって臨地実習で初めて受持ち患者とコミュニケーションを図るハードルの高さに対応したもので，2019年度より企画，実施している．

大学の教育に関連した教職協働は，大学教員と職員の協働による教育プログラム開発[7]や研修の企画・運営，教職協働による授業担当[8]などの実践事例が報告されているが，これまでに模擬患者参加型教育を教職協働で実践した報告はみられない．そのため，大学職員が模擬患者として教育に参加することで，教職協働をどのように認識しているのか，また協働上どのような課題があるのかは明らかではない．そこで，本研究では A 大学の模擬患者参加型教育に参加した大学職員を対象に，教職協働に対する認識と協働上の課題を明らかにすることとした．

2. 研究目的

本研究の目的は，模擬患者参加型のコミュニケーション演習を通して，大学職員の教職協働の認識および協働上の課題を明らかにすることである．

3. 用語の操作的定義

・大学職員：教員ではない大学の職員（non-academic）[9]とする．
・教職協働：大学・学部・研究科が掲げる理念と教育目標を実現するために，教員と職員がその資質を活かして，協力して取り組むこと[10]とする．
・模擬患者：実践強化目的で活用される模擬患者（Simulated Patient，以下 SP）[11]とする．

4. 研究方法

1）演習（以下，コミュニケーション演習）の概要

A 大学の学生が1年次に履修する基礎看護学実習は，病院で患者とコミュニケーションを図る初めての実習であり，病院で療養生活を送る患者を

理解することを目的の1つとしている．そのため，コミュニケーション演習における学習目標は，①患者に関心をもち，尊重した態度を示し行動することができる，②言語的・非言語的コミュニケーションを用いて患者と関わることができる，③患者や他者との関わりから，自分の傾向について気づきを得ることができる，である．

演習内の患者設定は，糖尿病で食事管理が必要な患者，脳梗塞でリハビリを受けている患者など，学生が受け持つ機会の多い事例とした．演習は，研究者が作成したシナリオに沿って，学生とSPによるロールプレイとした．ロールプレイ後には，教員がファシリテートしフィードバックを行うことで，学生がとった行動の意味や自己の思考の傾向を考え，よりよいコミュニケーションのあり方をグループ内で検討できるようにした．またSPもフィードバックに参加し，演習中に感じたことや疑問など発言する時間を設定した．

SPを担う大学職員へは，本演習の目的や内容，具体的なSPの情報，演習当日のスケジュール等について資料を用いて説明した．またシナリオ内容を暗記する必要はなく大意をつかめばよいこと，SPとしての言動はシナリオから大きな逸脱がない限りは自由でよいことも説明した．

2）研究対象者：A大学のコミュニケーション演習にSPとして参加し，本研究の調査協力が得らえた大学職員7名を対象とした．

3）調査期間：2021年2月

4）調査方法および内容

コミュニケーション演習にSPとして参加した大学職員への半構造的インタビューを実施した．インタビューは個別に実施し，インタビューガイドに沿って①SPとして学生に関わって感じたこと，②教員と演習を実施して感じたことや困ったこと，③今回の体験をどのようにとらえているかについて自由に語ってもらった．

5）分析方法

インタビュー内容は，同意を得て録音し，逐語録を作成しデータとした．逐語録の内容を精読し，大学職員がとらえた教職協働について，および協働する上での問題についての語りに着目し，その内容について記載された部分を抽出しコード化した．コードがデータを表現しているかを検討し，意味内容の類似性に着目しながらサブカテゴリー，カテゴリー名をつけた．なお，分析においては研究者間で討議し，意見が一致するまで検討を進めた．

5. 倫理的配慮

本研究は，純真学園大学の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号20-08）．研究対象者へは研究の目的や方法について，研究への参加は自由意志であり，不参加による不利益は一切ないこと，データはプライバシーの保護のため，個人が特定できないように取り扱うことについて，文書と口頭で説明した．また同意撤回書を準備し，研究参加への同意後もいつでも撤回できることを説明した．加えて，公表にあたり対象者が特定されることのないよう，プライバシー保護に留意した．

6. 結果

対象者7名の属性は，男性2名，女性5名であった．平均年齢は43.6歳（30～50歳）であり，大学職員としての経験年数は14.7年（7～26年）であった．インタビューの時間は，18～39分であり，11のサブカテゴリー，4つのカテゴリーが抽出された．以下，カテゴリーを【　】，サブカテゴリーを≪　≫，対象者の語りを「　」として表す．

データ分析の結果，コミュニケーション演習を通した教職協働の認識として，【学ぶ学生を再認識する機会になる】，【自身の役割の再認識の機会になる】，【新たな役割への意欲を感じる】，【模擬患者としての言動に迷う】が抽出された（表1）．

【学ぶ学生を再認識する機会になる】では，≪学生が演習に前向きに取り組む姿をとらえた≫，≪学生の成長過程を垣間見た≫，≪学ぶ姿から学生の印象が好転した≫の3サブカテゴリーを抽出した．

対象者は，「まだ1年生だけど一生懸命頑張って真面目に．…（中略）みんな頑張ろうって向かってるんだなって気がしました．」と語り，本

表1. 大学職員がとらえた教職協働

カテゴリー	サブカテゴリー
学ぶ学生を再認識する機会となる	学生が演習に前向きに取り組む姿をとらえた
	学生の成長過程を垣間見た
	学ぶ姿から学生の印象が好転した
自身の役割の再認識の機会になる	組織内の自他を認識する機会になる
	業務に活かす機会になる
新たな役割への意欲を感じる	もっと教育に関わってよい
	学生の学習状況がわかると、演技の幅が広がる
模擬患者としての言動に迷う	患者としてどこまで演じてよいのかわからない
	学生が無言になった時の対応がわからない
	学生によって同じ対応でよいのかわからない
	自身の発言が学生の学びになるのか迷う

演習は≪学生が演習に前向きに取り組む姿をとらえた≫機会となっていた．また演習に取り組む様子から≪学生の成長過程を垣間見た≫こともあり，≪学ぶ姿から学生の印象が好転した≫ものとなっていた．

【自身の役割の再認識の機会になる】では，対象者は「ただ単に事務をやってるだけじゃなくて，教育事務やってるんだよ，みたいな自覚ができる」，「同じ教育機関の一員として…（中略）お互いを知る機会になる」と，≪組織内の自他を認識する機会になる≫と認識していた．

また対象者は，「対外的にも…（中略）高校訪問の時とかガイダンスの時も私の口から話したりアピールしたりがこれはできる．アイテムとして1つもらったなと思ってます」と語っており，演習に参加した体験を≪業務に活かす機会になる≫ととらえていた．

さらに対象者は，「教育事務だから…教育にもうちょっとね．（中略）なんかもうちょっと学生にかかわっていいような気がするんですよね．」，「こういう機会っていうのは，もっともっとあってもいいのかなとは思いますね．」など，大学職員が≪もっと教育に関わってよい≫と考えていた．加えて「この演習，実習に関してどういう予習をしているのかがわかると，なんかもうちょっとこう，学生さんと対応する時にいろんな手を使いやすいのかな」のように，≪学生の学習状況がわかると，演技の幅が広がる≫と発言しており，これらの体験は対象者が【新たな役割への意欲を感じる】ものとなっていた．

一方，対象者は，「どういう風にしていいのか，どこまで演技していいのか（わからない）．」，「シーンってなった時に，こっちから話しかけていいんだろうか，待った方がいいのかって」と語り，ロールプレイで≪患者としてどこまで演じてよいのかわからない≫ことや，≪学生が無言になった時の対応がわからない≫こと，≪学生によって同じ対応でよいのかわからない≫など，【模擬患者としての言動に迷う】ことがあった．また本演習では，対象者は演習後のフィードバックにも参加し，気づいたことや改善できる点などのアドバイスを行ったが，≪自身の発言が学生の学びになるのか迷う≫ものとなっていた．

7. 考察

模擬患者参加型のコミュニケーション演習を通して，大学職員の教職協働の認識および協働上の課題を明らかにするために，半構造的インタビューを実施し検討した．その結果，対象者は本演習で「学んでいる」学生を再認識したとともに，自身の役割を再認識する機会ととらえていた．

一般的に大学組織は教務，総務など機能別の編成であり[12]，本学でも同様の組織体系となっている．対象者は教育研究に参画する機会が少ない状況であり，総務や教務等の自身の業務の範囲内で短時間に学生と関わる程度であった．しかし今回の試みで，対象者は通常業務とは異なるコミュニケーション演習という教育場面に参画し，≪学生が演習に前向きに取り組む姿をとらえた≫ことや，≪学生の成長過程を垣間見た≫ことにより，学生を肯定的にとらえると同時に，改めて専門的能力を養う役割をもつ医療系大学に身を置いているという認識につながったのではないかと考える．

また≪組織内の自他を認識する機会になる≫ことは，本演習で教員とコミュニケーションを図る機会があったことにより，組織内の他者を認識できることにつながったものであった．本学では教職員とも教務や入試，就職等の担当があり，会議や学生ガイダンス等で交流する機会はあるものの，担当以外の教職員間のコミュニケーションの場は多くはない．これまでも大学における教職員間の対話の少なさや職場内のコミュニケーション不足が報告されており[12, 13]，このような取り組みは教職員間のコミュニケーションや対話の機会となりうる可能性があると考える．職場の人間関係構築のためのコミュニケーションは，組織コミットメントの先行要因であり，成果として生産的行動を生み出すことが報告されている[14]．本研究でも，対象者は本演習に参加することで，「高校訪問で話ができる」，「対外的なアピールになる」と≪業務に活かす機会になる≫ことを認識していることから，今回の協働は教職員間の関係構築のみならず，大学職員の担当業務にも有用となる可能性があると考える．

一方，対象者はコミュニケーション演習に参加して，SPとしての言動に迷うことがあったことが明らかになった．

臨地実習で学生が受け持つ患者の言動がさまざまであるように，SPとしての発言や振る舞いはシナリオから大きく逸脱しなければさまざまであってもよいと考え，説明していた．しかし実際には研究者の説明が対象者にうまく伝わらなかったことで，SPとしてどのような発言や行動をすればよいのか，反応もさまざまな学生にどう対応するとよいのか，対象者自身が伝えたいアドバイスが教育として適しているのかなど，迷う状況がいくつも生じていたことが明らかになった．これは，SPとは何か，研究者が認識しているSPとはどのようなものかというSPのとらえ方や，コミュニケーション演習における学生の想定される言動に関する説明不足が要因と考える．今後の課題として，演習において教員がSPをどのようにとらえているかを対象者に十分説明し，認識を統一することや，学生とSPとの間で発生する沈黙，学生の意外な発言や動きなどの想定場面についても十分に説明し，対象者が把握できるようにすることが重要である．

対象者への事前説明では，学生へ提供する情報の範囲と課題についても説明していたが，実際の演習場面では，情報提供の不十分さにより，SPとしての言動に躊躇があったことが明らかになった．対象者は，「（学生が）どういう予習をしていてってとこがわかると，対応する時にいろんな手を使いやすいのかな」と発言していた．SPとしての発言や振る舞いをどのように行うかをさまざまに検討しており，学生の状況を把握することでよりSPとしての演技の幅が広がると考えていたことがうかがえる．このことから，対象者はSPとしての訓練を受けていない状況でも，患者という役割を十分遂行することができると考えられる．

近年，大学は組織全体で学生を育てるという視点で運営すること，大学の改革を進めるためには，大学職員は教員と対等な立場での教職協働により，大学運営に参画することが重要である[13]とされている．対象者がSPとして迷いや不安なくコミュニケーション演習という教育活動に参加し，よりリアルな患者を演じることで，学生の学び多い教育につなげることができると考えられる．そのため，学生の学習進度や内容について情報提供

するだけではなく，演習で使用するシナリオやSPの演技そのものについても事前にディスカッションすることが重要である．

8. 本研究の限界と課題

本研究では，コミュニケーション演習を通して，大学職員が認識する教職協働や，協働上の課題について検討した．しかしながら，教職協働で実施した教育成果として，学生の学びがどのようなものであったか，学びの内容を踏まえた協働の効果については検討されていない．そのため，今後は学生の学びの観点からの検討および教職協働で実施した教育活動の効果についても検討が必要である．

9. 結論

模擬患者参加型のコミュニケーション演習を通して，大学職員がもつ教職協働の認識および協働上の課題を明らかにすることを目的に，大学職員に対して半構造的インタビューを実施した．

その結果，対象者は今回の教職協働を，学ぶ学生や大学職員としての自身の役割を再認識する機会となることを認識していた．またSPという新たな役割への意欲を感じるものとなっていた．このことから，教職協働において実施した今回のコミュニケーション演習は，改めて大学職員が教育の場に存在しているという自覚につながるものとなるとともに，教職員のコミュニケーション促進の場になる可能性が示唆された．

一方，大学職員は，今回の取り組みで模擬患者としての言動や，演習後の自身の発言が学生の学びになるのか迷っていたことが明らかになった．

今後もコミュニケーション演習を通した教職協働を進めるためには，大学職員が担うSPについて，また学生の学習状況について共通認識を得ること，演習場面であらかじめ想定される状況を事前に大学職員が把握し，行動できるよう十分な説明を行うこと，準備段階で教職員間のディスカッションを十分に行うことが課題として明らかになった．

引用文献

1）文部科学省．学校基本調査 調査結果の概要（高等教育機関），2020年，https://www.mext.go.jp/content/20210824-mxt_chousa01-000017617-1.pdf.［2021年9月10日確認］
2）内閣府．教育再生実行会議，これからの大学教育等の在り方について（第三次提言），2013年，https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf［2021年9月10日確認］
3）文部科学省．大学設置基準等の改正について，2017年．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1383949.htm.［2021年9月10日確認］
4）一般社団法人 日本看護系大学協議会．看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標，2018年，https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf.［2021年9月10日確認］
5）厚生労働省．看護基礎教育検討会報告書，3，https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf, 2019年，［2021年9月9日確認］
6）中村もとゑ，山﨑歩，渡邉聡美，鈴木香苗，眞崎直子．看護系大学における模擬患者の養成及び活用の現状と課題，日本赤十字広島看護大学紀要，29-38，2016.
7）澤邉潤．教職協働による地域連携型教育プログラム開発の試行的取組－新潟県小千谷市へのフィールドワークを事例として－，新潟大学高等教育研究，6，39-44，2018.
8）藤原俊幸，井上英也，松本欣弥ら．教職協働で行う初年次教育－ホスピタリティ概論の実践と課題－，長崎国際大学教育基盤センター紀要，1，55-80，2018.
9）大場淳．大学の管理運営・経営と大学職員，大場淳，山野井敦徳編，大学職員研究序論，広島大学高等教育研究開発センター，25，2003.
10）石井秀則．立命館の教職協働－立命館大学での教学部・学生部での経験をもとに－，立命館高等教育研究第14号，1-13，2014.
11）山本直美，伊藤朗子，冨澤理恵，山本純子，梅川奈々，杉浦圭子，久米弥寿子．看護技術教育のための模擬患者（Simulated Patient: SP）養成の実際，千里金蘭大学紀要，12，151-160，2015.
12）大島英穂．教職協働による大学運営－職員の役割を中心に－，立命館高等教育研究第14号，15－27，2014.
13）文部科学省 大学教育部会．大学の事務職員等の在り方について【参考資料】，2016年，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/icsFiles/afieldfile/2017/01/06/1380781_02.pdf.［2021年10月11日確認］
14）松山一紀．帰属意識と忠誠心，そして組織コミットメント，商経学叢，60（1），83-106，2013